

世代間対話の場としての博物館づくり

—総合研究プロジェクト「モノをめぐる価値観の変遷とその多様性に関する近現代史」研究報告—

池田貴夫・会田理人・青柳かつら・山際秀紀・舟山直治・村上孝一・出利葉浩司・小林孝二

Key Words

北海道博物館 (Hokkaido Museum)、展示資料 (Exhibits)、展示手法 (Methods of exhibiting)、空間形成 (Creating space)、表現の工夫 (Devising different expressions)

1 はじめに

本稿は、2012年度から2015年度にかけて実施した総合研究プロジェクト「モノをめぐる価値観の変遷とその多様性に関する近現代史—世代間対話の場としての博物館づくりに向けて—」(以下、「本研究プロジェクト」と略記)の総括報告である。

北海道開拓記念館(2015年4月に北海道立アイヌ民族文化研究センターと統合し、新たに北海道博物館として開設)では、2008年度から2011年度にかけ、『高度経済成長期』における道民生活の変化に関する基礎的研究を進めてきた(出利葉ほか 2012)。また、その成果をもとに、2010年には第155回テーマ展『お茶の間からリビングへ—家族をとりまく道具の変化—』(出利葉ほか 2011)など、高度経済成長期前後の産業や暮らしの変化をテーマとした企画展を開催し、変化していく道具を目の前にして、子ども、両親、祖父母といった世代間の対話が促進される効果を見出ししてきた。これらの研究と実践で蓄積された知見を引き継ぎ、より発展的に世代間対話の場としての博物館づくりを目指したものが、本研究プロジェクトである。

常に新しいモノが生み出され更新される現代において、モノの大切さなどに対する子どもたちや青年層の意識は低下してきている。一方、高齢者の方々は、現代におけるモノの変化のスピードについていけないという現状がある。モノに対する価値観の隔たりは広がる一方で、その価値観をめぐる世代間の対話は明らかに稀薄となっている。このような現代社会において、モノの価値を見つめ直し、よりよい未来の暮らしを世代を超えて考える場として、博物館の活用が期待されてよい。

とりわけ近年において、博物館は多くの介護施設や老人福祉施設などにご利用いただいている。要介護者や高齢者の方々が、若い引率者とともに展示室をゆったりと巡り、昔懐かしい道具、昭和の道具について、会話を弾ませている風景が毎日のように見られる。こうした風景からは、過去を振り返ることで高齢者などの生活の質の向上や情動の安定をめざすといった回想法(黒川 2005 など参照)の実践の場として、博物館の役割も一層増していることが感じられる。

昔の道具類を前に、コミュニケーションが促進されていく。そして、引率される側と引率する側の互いの理解と絆も深まっていくのである。また、博物館における回想法の現場を見てみると、多くの要介護者や高齢者の方々は、かつて自分が経験した暮らし、使った道具、それらにまつわるエピソードを語り、伝えたがっている。回想法の現場は、自分の生きた時代の変化、そしてかつてあった知識や技術を若い世代に引き継いでいく場でもあるのである。

一方、北海道開拓記念館は、北海道立アイヌ民族文化研究センターと統合し、2015年4月より、北海道の自然・歴史・文化を広く紹介する北海道博物館として新たにオープンすることとなった。したがって、本研究プロジェクトは、「世代間対話」をキーワードとして博物館は何かできるのかといった研究はもちろん、展示設計や教育プログラムの開発、さらにはオープン後の効果検証など、まさに博物館づくりの実践をとおして「世代間対話の場としての博物館」の具体像をつかもうとしたものとして位置づけられる。

本稿は、本研究プロジェクトでこれまで蓄積・公表してきた成果を総括するとともに、その成果を北海道博物

館の展示づくりに最大限に反映させてきたプロセスの覚書でもある。

なお、本稿は本研究プロジェクトの研究代表者である池田がまとめ、メンバーの意見をもとに加筆・修正を加えたものである。

2 研究の目的および方法

子ども、両親、祖父母といった世代間の対話が促進され、対話をとおして子どもと大人による双方向の情報交換がなされ、そのことによりモノの大切さなどを振り返り、学び、またよりよい未来の暮らしを発見していく場を、博物館が提供していくためのモデルケースを示すことが、本研究プロジェクトの最終的な目的である。

その目的を達成するため、①北海道博物館収蔵資料の再評価と付帯情報の収集、②講座・体験講座における対話の実践、③総合展示の構築での実践、④北海道博物館オープン後の効果検証、という4段階の項目を設定した。

3 北海道博物館収蔵資料の再評価と付帯情報の収集

北海道博物館には、家庭生活や社会生活の移り変わり、諸産業や製品の移り変わり、アイヌ文化の伝承やアイヌの生活変化に関する物質文化資料が多数収蔵されている。本研究プロジェクトを遂行する前提として、これらの資料群を再評価する作業を第1段階として設定した。すなわち、収蔵資料に付随する収集時の情報に加え、機能、材質、大きさ、製作技術とアイデア、意匠、機械化、利便性、清潔性、多機能性、環境への配慮、変化のスピードといった多角的な視点から分析・再分類した。また、資料の活用の幅をより広げていくという観点から、モノをめぐる道民のあらゆる記憶と認識について聞き書き調査を行うなど、収蔵資料に関する付帯情報の収集に努めた。

以下は、2012年度から2015年度12月末日にかけて、上記研究の一環として論文等ですでに公表した成果であるので参照されたい（公表順に表記）。

- ①池田貴夫 2012. 日本領期樺太の民俗・緒論. 日本民俗学 272: 72-89.
- ②池田貴夫 2013. ベンケイに刺さっている魚は何? . 北海道開拓記念館だより 42(4): 4-5.
- ③池田貴夫 2013. 災害と民具研究—北海道南西沖地震後の奥尻島の20年を振り返りつつ—. 民具研究 147: 3-20.
- ④会田理人 2013. 大正期利尻島のアワビ移植事業(1). 北

海道開拓記念館研究紀要 41: 83-94.

- ⑤舟山直治・池田貴夫・村上孝一 2013. 厚沢部町から収集した神楽関係資料. 北海道開拓記念館研究紀要 41: 326-287.
- ⑥池田貴夫 2013. 日本人において「雑魚」とは何か? —ウグイに対する認識の地域差・時代差をめぐって—. 北方地域の人と環境の関係史 2010-2012調査報告. pp. 185-196. 北海道開拓記念館.
- ⑦小林孝二 2013. 北海道建築協会機関誌『北海道建築』に見る寒地住宅研究の動向. 北方地域の人と環境の関係史 2010-2012調査報告. pp. 197-204. 北海道開拓記念館.
- ⑧山際秀紀・会田理人 2013. 北海道に導入されたプラウ、動力機械—アメリカ・マサチューセッツ州調査から. 北方地域の人と環境の関係史 2010-2012調査報告. pp. 221-234. 北海道開拓記念館.
- ⑨池田貴夫 2013. なにこれ!? 北海道学. 北海道新聞社.
- ⑩池田貴夫 2014. 雪国とは—積雪寒冷地の生活文化史—. 積雪寒冷地における高齢者の居場所づくり. 坂倉恵美子編著. pp. 1-22. ワールドプランニング.
- ⑪山際秀紀 2014. 寒冷地稲作の普及過程における水稻直播器の考案と利用について. 北海道開拓記念館研究紀要 42: 127-142.
- ⑫椿かすが漫画・池田貴夫監修 2014. 漫画・うんちく北海道. メディアファクトリー新書101. KADOKAWA.
- ⑬青柳かつら編 2015. 士別市朝日町の農林業の歴史と文化—聞き取り調査の記録— (JSPS科研費24700938報告書). 北海道開拓記念館.
- ⑭青柳かつら 2015. 住民協働による森林利用技術の映像記録と活用—士別市朝日町の事例—. 北方地域の人と環境の関係史 研究報告. pp. 173-176. 北海道開拓記念館.
- ⑮山際秀紀 2015. 北海道におけるアメリカ製畜力農具の導入とプラウ製造技術の発達. 北方地域の人と環境の関係史 研究報告. pp. 201-212. 北海道開拓記念館.
- ⑯北海道博物館編 2015. 第2回企画テーマ展「鶴」パンフレット. 北海道博物館.

4 講座・体験講座における対話の実践

北海道開拓記念館と北海道立アイヌ民族文化研究センターは、2013年度から2014年度にかけ、北海道博物館の開設とその概要を北海道民に広く伝え、理解いただくため、『リニューアル予告展示会 北海道開拓記念館から北海道博物館へ』という巡回展を企画し、北海道内各地で展開することとした。この巡回展は、北海道博物館の目指す姿や新しい新展示（以下、「総合展示」と表記）

のイメージをパネルで紹介するとともに、総合展示の目玉となりうる実物資料を展示するというもので、本研究プロジェクトとしては「世代間対話」をキーワードとし、昭和期の懐かしい道具類の展示を試みた。また、巡回展の期間中には、学芸員が展示会場に赴き、一般向け講座や子ども体験講座を行った。これらは、博物館資料を前にして、北海道民と筆者ら、あるいは世代を異にする参加者同士の間でどのような対話がなされるのか、その可能性を見いだす機会でもあり、一般向け講座も対話型の講座を意識し、また子ども向け講座では、子どもと保護者そして筆者らとの対話が促進されるような内容を重視し、実践した。

以下は、この巡回展において実施した、本研究プロジェクトのメンバーが実施した講座・体験講座の一覧である（実施順に表記）。

- ①一般向け講座「語り合しましょう！ 昭和のくらしの道具」実施日：2013年11月9日（土）、会場：礼文町町民活動総合センター、講師：舟山直治・小林孝二。
- ②子ども体験講座「体験しよう！ 昭和のくらしの道具」実施日：2013年11月9日（土）、会場：礼文町町民活動総合センター、講師：舟山直治・小林孝二
- ③子ども体験講座「アイヌ民族の狩りとわな」実施日：2013年12月1日（日）、会場：名寄市北国博物館、講師：出利葉浩司。
- ④一般向け講座「北海道林業を支えた技術と道具」実施日：2014年1月18日（土）、会場：士別市生涯学習情報センターいぶぎ、講師：青柳かつら。
- ⑤子ども体験講座「ガリ版でいんさつ屋さん」実施日：2014年1月19日（日）、会場：士別市生涯学習情報センターいぶぎ、講師：会田理人・青柳かつら。
- ⑥一般向け講座「江差町伏木戸の川裾神社と若狭の水無月神社」実施日：2014年6月14日（土）、会場：旧檜山爾志郡役所（江差町郷土資料館）、講師：舟山直治。
- ⑦子ども体験講座「稲わらで縄をなおう！」実施日：2014年9月28日（日）、会場：帯広百年記念館、講師：池田貴夫・舟山直治。
- ⑧一般向け講座「北海道らしさの秘密」実施日：2014年9月28日（日）、会場：帯広百年記念館、講師：池田貴夫。
- ⑨子ども体験講座「よく見てみよう！ アイヌ文様」実施日：2014年10月12日（日）、会場：別海町郷土資料館、講師：出利葉浩司。
- ⑩一般向け講座「北海道林業を支えた技術と道具」実施日：2014年11月9日（日）、会場：足寄動物化石博物館、講師：青柳かつら。
- ⑪子ども体験講座「羊毛クラフトに挑戦！」実施日：

2014年11月22日（土）、会場：根室市総合文化会館、講師：会田理人。

また、本研究プロジェクトのメンバーである青柳かつらは、過疎・高齢化が急速に進む日本の中山間地域では、住民の社会生活の維持や地域資源の管理が危機に瀕している現状を見据え、博物館を核とする地域再生および地域資源管理という観点から、士別市朝日町の朝日町郷土資料室を拠点として、博物館資料を前にさまざまな年齢層の地域住民との対話や聞き取り調査を継続して行ってきた。その蓄積の成果は、北海道博物館総合展示第3テーマ『北海道らしさの秘密』の「自然の恵みとともに」を設計していくなかで、めまぐるしい産業や生活の変化を体験しながら暮らしてきた地域の人びとは、未来に何を伝えたいのかという課題の議論に大きく反映された。なお、青柳と朝日町の地域住民が協働で作成し、地域に配布した地域資源管理に関する成果物などには、以下のものがある。

- ①知恵の蔵運営委員会・朝日町郷土資料室・青柳かつら 2013. 士別市朝日町 知恵の蔵おすすめマップ. 北海道開拓記念館。
- ②青柳かつら 2014. 地域再生をめざした博物館を核とする地域資源ナレッジマネジメントに関する研究―住民参加による地域資源マップ製作―. 北海道開拓記念館研究紀要 42: 1-22.
- ③青柳かつら・朝日町郷土資料室・知恵の蔵運営委員会 2015. 士別市朝日町 知恵の蔵 探してみよう！ 地域のお宝 活動プログラム集. 北海道開拓記念館。

5 総合展示の構築での実践

以上の研究・活動をとおして得られたデータや知見を基礎データとして、博物館資料を目の前にしてどのような世代間対話を促進できるのか、またそれらはモノの大切さの再認識やよりよい未来のくらしの発見にどうつながられるかを考察した。そのうえで、実際に北海道博物館の総合展示のなかで、世代間対話を促進させる展示づくり、特に、展示構成の検討、資料の選定、ならびに展示手法の工夫に取りかかった。

総合展示づくりのなかで、本研究プロジェクトの一環として世代間対話の促進を強く意識したのは、第3テーマ『北海道らしさの秘密』の全域、ならびに第4テーマ『わたしたちの時代へ』のなかの「高度経済成長の時代」のコーナーである。

第3テーマ『北海道らしさの秘密』は、北海道独特の景観、海や大地の資源を活かし育ってきた数々のモノづ

くり、多雪寒冷な気候に適応しようと模索した生活スタイルなど、さまざまな<北海道らしさ>が生成されてきた過程や背景を、産業や暮らしなどの歩みをたどりながら振り返ることをとおして、歴史に裏づけられた北海道の魅力とアイデンティティを再発見する空間と位置づけたものである。まさに、よりよい未来の暮らしや未来の北海道を世代間で対話しながら考え、探していくにふさわしいコーナーとしたいと考えた。展示づくりにあたっては、「3」で記した北海道博物館収蔵資料の再評価と付帯情報の収集の成果を最大限に活用した。

また、第4テーマ『わたしたちの時代へ』は、20世紀のはじまりから現代までの北海道の歩みを紹介する。特に、この激動の時代を特徴づける戦争と高度経済成長に注目して、人びとがどのように生きてきたか、出来事をたどりながら振り返るといふものである。そのなかの「高度経済成長の時代」のコーナーは、まさに本研究プロジェクトの前身である『『高度経済成長期』における道民生活の変化に関する基礎的研究』以降の研究の蓄積を活かし、いわゆる昭和の道具類を展示し、現在わたしたちが使用している道具類と比較しながら、暮らしの変化を実感しつつ、世代間対話の促進を図るコーナーとすることを意識した。

(1) 第3テーマ『北海道らしさの秘密』での実践

第3テーマ『北海道らしさの秘密』は、入口の象徴展示のほか、大きく分けて「自然の恵みとともに」、「四季とともに」、「<北海道らしさ>のア・ラ・カルト」の3つのコーナーからなる。

入口の象徴展示での実践

入口の象徴展示では、総合展示の基本コンセプトである「北東アジアのなかの北海道」、「自然と人との関わり」を意識し、1936年に吉田初三郎が描いた『北海道鳥瞰図屏風』(複製)を設置し、明治時代以降に大きく姿を変え、いまの北海道へと近づく歴史の一コマを提示した。また、近年収集することのできた、かつて北海道と樺太、千島をつないでいた海底ケーブル、さらには蟹工船や青函連絡船の模型など、北と南へひろがる交流の一端を提示した。世代間対話という観点では、ここでは、来館者や親類・知人の出身地探し、北海道の姿の移り変わり、青函連絡船を含むかつての旅の思い出、かつての樺太や千島での産業や暮らしなどの対話が促進されることを意図した。

「自然の恵みとともに」コーナーでの実践

「自然の恵みとともに」は、「はばたく！ 北海道ブランド」、「大地に生きる」、「海に生きる」、「山に生きる」、

「道をつなぐ」の小コーナーで構成した。

「はばたく！ 北海道ブランド」は、かつて北海道が生産していたもの(マッチ軸木ほか)、あるいは今でも北海道で生産されているもの(菜豆ほか)など、北海道が誇る産物の数々を展示した。「大地に生きる」では、明治時代の殖民区画の様子、そして大地でさかんに農業が営まれるようになっていった過程を、さまざまな道具類(鋤、プラウほか)やジオラマ(殖民区画の様子、馬耕の様子)などで表現した。「海に生きる」では、現在の北海道文化のなかにも大きな影響を与え続けているかつてのニシン漁、そして日本のみならず中国などでも珍重されてきた磯まわりの産物の漁について、それらで使用されてきた大小の道具類(ニシン釜、アワビカギほか)やジオラマ(ニシンの沖あげ風景)で表現した。

「山に生きる」では、北海道が石炭をはじめさまざまな鉱物の主要な産出地であったこと、林業や林産業がさかんであったことを、さまざまな道具類(採炭具、鉱物各種、鋸ほか)やジオラマ(切羽での作業の様子)で展示した。

「道をつなぐ」では、明治時代の駅通制度、その後の鉄道などの交通網の発達、さらにはその陰にあった囚人労働者やタコ部屋労働者などについて、実物資料(駅通里程表、囚人のつくったレンガほか)や模型類(義経号、タコ部屋ほか)を使用して展示した。

「世代間対話」の促進という観点からは、展示資料の選定などについて注意したことはもちろんであるが、「大地に生きる」、「海に生きる」、「山に生きる」の3つの小コーナーの設定を重視した。

まわりを海で囲まれ、かつ広大な大地と山々からなる北海道では、それぞれの地域において産業や暮らしのあり方が大きく異なり、農業、漁業、石炭産業、林業など、それぞれに従事してきた人びとのそれらの仕事への思いは強いものと認識している。また、積雪寒冷地では高齢者にとっては高い主観的幸福感をもたらす背景の1カテゴリーとして「愛着あるこの地」といった地域環境とその土地の恵みに対する意識があることが予見されている(原井ほか 2014)。そこで、「はばたく！ 北海道ブランド」および「道をつなぐ」以外のコーナーでは、北海道の人びとにとって極めて身近な環境分類であると思われる「大地」、「海」、「山」という3つの分類にもとづいて、産業や産物に関する展示を行った。

また、上記3つの小コーナー名の述語は、すべて「生きる」で統一した。「…の歴史」や「…の歩み」といった言葉ではなく、「広大な大地のなかで自分はこう生きてきたなあ」、「海でこんなことがあったなあ」、「かつて山もにぎやかだったなあ」といった、人がそれぞれの「愛着あるこの地」で生きてきた思いを喚起させる言葉

として、「生きる」という動詞を採用した。

さらには、例えば磯まわりの漁の道具類で何が獲れるのか、子どもの理解をうながすため、また大人が子どもに説明しやすい環境をつくるため、ナマコやバフンウニなどの複製も展示した。

「四季とともに」コーナーでの実践

「四季とともに」は、「四季を感じる」、「冬を生きる」、「くらしを彩る」の小コーナーで構成し、トピックとして「大正時代のある客車のなかで」のコーナーを設けた。

「四季を感じる」は、本州などとは異なる四季の移ろいのなかで、移住者が持ち込んだ生活様式や季節行事、あるいは北海道で新たに生成されてきたくらし方や行事などを、四季それぞれの道具類（板かるた、七夕の子ども行列の行灯、スキー・スケートほか）や写真などで紹介した。

「冬を生きる」では、寒い冬を暖かく過ごすために使用・開発されてきた道具類の数々（火鉢、炬燵、各種のストーブ、ストーブのポスターほか）、北海道で使用・開発されてきた除雪道具（コスキ、ジョンバ、ユキオシほか）の数々を紹介した。

「くらしを彩る」では、明治時代おわりごろから大正、昭和のはじめごろにかけて、扇風機、冷蔵庫、蓄音機、あるいは文化かまどといった目新しい道具類が家庭のなかにみられるようになるなど、都市を中心に人びとのくらしが大きく変化していったことを紹介した。

「大正時代のある客車のなかで」では、大正時代中頃の冬に倶知安から小樽へ向かう三等客車の風景を再現し、さまざまな職業の人びとや学生たちの当時の服装などを紹介した。また、客車のなかで繰り広げられたであろう会話を、方言を交えて、随時流している。

世代間対話の促進という観点からは、まず、「自然の恵みとともに」と同様の論理と目的で、小コーナー名の述語を「感じる」、「生きる」、「彩る」という動詞を採用した。「大正時代のある客車のなかで」は、「客車のなかで何がおこっているのだろうか？」、「どんなものがあるのだろうか？」、「何をしゃべっているのだろうか？」といった関心を喚起するために「…のなかで」という表現を採用してみた。

また、展示資料は、多くの高齢者の方々が一目で懐かしいと感じるであろうものを、意識的に選定した。先述したように、博物館は近年において、デイサービスセンター、グループホームなど、多くの介護施設や老人福祉施設にご利用いただき、いわゆる回想法の実践の場として活用されて行く。「四季とともに」では、展示資料をおおむね戦前期から戦後期にかけて青少年期を過ごした高齢者にとって懐かしさを感じる場を兼ね備えた展示構

成とした。さらに、例えば積雪寒冷地の北海道においては、暖房や除雪などの思い出はつきない事象と考え、この「四季とともに」では、できるだけさまざまな暖房具や除雪具をまとめて展示するスペースを確保するなどの工夫を行った。

なお、「冬を生きる」と、それと向き合う「大正時代のある客車のなかで」の間は広めのフリー空間とし、長椅子を置くなど、ゆったりと展示を眺め、かつ休息でき、会話もはずむ環境を整えた。

「<北海道らしさ>のア・ラ・カルト」コーナーでの実践

「<北海道らしさ>のア・ラ・カルト」は、「おみやげといたら、クマ？」、「これも「らしさ」って感じ？」、「なんだか、お腹すいてこない？」、「地名って、おもしろいかも？」の4つの小コーナーで構成した。

「おみやげといたら、クマ？」では、北海道の名所、観光、おみやげ、祭りなどに焦点をあて、それらの情報が描かれた北海道地図をはじめ、かつてのさまざまなおみやげもの（クマの木彫り、熊鯨の缶、アイヌの工芸品ほか）やおまつりで使われてきた演奏具（篠笛、ささらほか）を展示した。

「これも『らしさ』って感じ？」では、今となっては忘れ去られているかもしれないが、ネームカードや説明文を読と、高齢者の方々であれば思い出し、また、これらを全く知らない大人や子どもでもいかに北海道らしいと感じてもらえるようなモノ、例えば、郵便集配人などが使用したクマ除けラップ、冬季に便所で凍ったふん尿の山を突きくずす棒などを展示した。

「なんだか、お腹すいてこない？」では、開拓をはじめたころの食事、現在では見られなくなった保存食であるシバライモやウグイの焼き干し、保存食から根づいた郷土料理（にしん漬、いずしのサンプルほか）、三平皿、ジンギスカン鍋などを展示した。

「地名って、おもしろいかも？」では、『うんちくマシン：北海道の地名って、おもしろいかも？』と題した地名検索マシンを置き、アイヌ語に由来する地名、本州などの地名や人の名前に由来する地名、そのほかのいろいろな地名など、北海道の20箇所の地名についてその由来を検索できるようにした。また、玉置神社奉祀之景絵馬（複製）など、『うんちくマシン』で検索できる地名に関連した資料を展示した。

このコーナーの特徴の一つとして、どの世代の来館者にとっても、一目見てこれが何なのかわからない資料、ネームカードや説明文を読んでではじめてそういうものなのかと理解できる資料を、比較的多く展示したことが挙げられる。すなわち、世代間対話の促進という観点から換言すれば、「これって一体何だろう？」といった言葉

を大人も子どももついで口に出してしまいそうな仕掛けとすることもできそうである。そして、展示資料を熟視し、ネームカードや説明文を読み、「なんだそうだったのか」、「このようなものも北海道にあったのか」、「そういえば思い出した」、「昔おじいさんが使っていたのを見たことがある」といった「対話」のやりとりのなかで、さまざまな発見にたどり着いていただくことを意図したものである。

また、このコーナーでは、青少年にとって親しみやすいような言葉を、それぞれの小コーナーのタイトルに使用してみた。「…って感じ？」などは、正しい国語の表記という観点からは批判を受けざるを得ないかもしれないが、あえて青少年によって使い慣れている言葉を盛り込むことにより、少しでも見慣れない展示物に興味をもっていただき、対話の糸口となればと考えて使用したものである。

さらに、大人よりも子どもたちが先に飛びつきそうな資料も展示した。小学生の運動会のYOSAKOIソーランで使われた鳴子3点もその一つである。これらは、子どもの側からつい話したくなってしまいうような効果を意図したものである。

(2) 第4テーマでの実践

第4テーマ『わたしたちの時代へ』は、大きく分けて「アジアの戦争と北海道」、「高度経済成長の時代」、「いまとこれからの創る」の3つのコーナーからなる。本研究プロジェクトとしては、このなかの特に「高度経済成長の時代」のコーナーにおいて、世代間対話の促進にむけた実践を行った。

「高度経済成長の時代」コーナーでの実践

「高度経済成長の時代」は、「石炭から石油へ」、「くらしの大変化」、「さまざまな発言」の3つの小コーナーで構成した。そのなかの「くらしの大変化」が、本研究プロジェクトの実践の舞台である。

「くらしの大変化」では、壁面側にはトラクターやトヨタ・パブリカなどの大型資料を展示するとともに、北海道の住まいについて戦後に生まれた三角屋根住宅へと至る変遷を展示するなど、戦後のめまぐるしいくらしの変化を伝えようとしたもので、過去の記憶がよみがえる糸口となることを期待した。

特に、コーナーの中心部分には、外壁は下見板の木造建築を想定した、四畳半の畳の部屋を展示台とし、中央にはちゃぶ台を配置し、その上には美顔器を置いた。その他、室内にはテレビや実際に触ることのできる黒電話のほか、1950年代から1960年代にかけてお年玉付き年賀はがきの特等や1等賞品であったミシン、電気洗濯機、

ポータブルテレビ、8ミリ撮影機と映写機のセットなど並べた。実際に、ミシンは、現在の北斗市にいらした方が1955年に当てた特等賞品の現物である。その他、炊事道具や遊び道具、カメラなど、まさに昭和の品々の世界である。

また、家の外には、木製の電柱、井戸端会議もできそうな木製の長椅子、筒型の郵便ポストなども配置した。さらに、展示空間の上部には、昭和から平成にかけてのくらしの移り変わりを、それぞれの時代の家族写真などで带状に展開させている。

このコーナーは、再三言及するが、高齢者の方々にとっての回想の場であり、懐かしい道具、昭和の道具の前に会話を弾ませやすい空間づくりを意識した。とりわけ、四畳半部屋を囲い込むように通路を設置し、どの方向からも眺められ、かつ車椅子でゆったりと巡れるようにした。また、展示物としてある木製の長いすも、ゆとりをもって昭和の雰囲気味わっていただくため、休憩するための椅子を兼ねさせた。

また、このコーナーは、高齢者に限らず、あらゆる世代が関心を抱きやすい空間であることも確かである。どの品々も、現在わたしたちが使用している何かの道具につながっているため、子ども、両親、祖父母といった世代間の対話が促進されやすいものと認識している。例えば、四畳半部屋の一角には、音楽を聴く道具、カメラ、映像を見る道具、遊び道具など、機能の異なる昭和の道具類がケース内に展示されている。筆者がこの展示を前に、現在ではこれらの多くの機能をスマートフォン一台で享受しているという話を家族連れの利用者にとると、大人は大きくなすぎ、子どもは「昔はこうだったのか」といった反応を示す光景も、少なからず見受けられている。

6 まとめにかえて

以上が、本研究プロジェクトにおける①北海道博物館収蔵資料の再評価と付帯情報の収集、②講座・体験講座における対話の実践、③総合展示の構築での実践に関する経過である。本研究プロジェクトで蓄積・構築されてきた成果が、北海道博物館のみならず、全国の博物館にとっても、何らかの参考になれば、幸いである。

特に、世代間対話の場としての博物館づくりという観点からみると、さまざまな世代にとって懐かしい資料、あるいは昭和の資料を展示することのみならず、地域性を反映した資料、一見何だかわからないような資料、子どもの関心を喚起させる資料など多様な観点からの展示資料の選定、それらの資料を現代の道具と結びつけて考えやすい展示といった展示手法の工夫、あるいはゆったり

と展示を眺められる空間づくり、さらには展示コーナーのタイトル、ネームカード、説明文の表現の工夫といったことも重要な要素となるであろうことは、本研究プロジェクトでの議論を通じて提起できたのではないと思われる。

さて、このような経緯も含め、2015年4月18日、北海道博物館は、オープンした。幸いにも、9月20日には通算来館者数が10万人に達するなど、多くの方々に北海道博物館をご利用いただいている。また、家族連れの方々の来館も多く、さらに介護施設や老人福祉施設などにも継続的にご利用いただいている。

オープン以降は、本研究プロジェクトで設定した4段階目の研究項目である「④北海道博物館オープン後の効果検証」に取り組んでいる。北海道博物館では学芸員が祝日に総合展示室で来館者と対話する機会を設けるとともに、本研究プロジェクトのメンバーは随時、第3テーマおよび第4テーマ「高度経済成長の時代」のコーナーを巡回し、対話が促進されているか、どのような対話が繰り広げられているかなど、聞き取りなどを行いながら、データの収集に努めている。これらのデータを蓄積・精査し、「世代間対話の場としての博物館」のモデルケースとして、より効果的な展示へと発展させていくことが、

今後の課題である。

最後に、本研究プロジェクトの遂行にあたり、お世話になった多くの機関、協力いただいた方々に、厚くお礼申し上げます。

文献

- 黒川由紀子 2005. 回想法-高齢者の心理療法-. 誠信書房.
- 出利葉浩司・会田理人・青柳かつら・池田貴夫・小林孝二・舟山直治・村上孝一・山際秀紀 2012. モノをとおしてみた北海道における高度経済成長期前後の産業と生活の変化について-分野別研究『高度経済成長期』における道民生活の変化に関する基礎的研究の経過報告-. 北海道開拓記念館研究紀要 40: 161-172.
- 出利葉浩司・池田貴夫・青柳かつら 2011. 展示会『お茶の間からリビングへ-家族をとりまく道具の変化-』を企画して-現代を展示するのに、なぜWiiとiPodは必要だったのか-. 北海道開拓記念館研究紀要 39: 135-158.
- 原井美佳・片山めぐみ・村松真澄・坂倉恵美子 2014. 特別豪雪地帯の高齢者の主観的幸福感についての検討. 坂倉恵美子編著. 積雪寒冷地における高齢者の居場所づくり. pp. 106-134. ワールドプランニング.



写真1 第3テーマ入口の象徴展示コーナー



写真2 第3テーマ「自然の恵みとともに」コーナー



写真3 第3テーマ「四季とともに」コーナー



写真4 第3テーマ「大正時代のある客車のなかで」コーナー



写真5 第3テーマ「<北海道らしさ>のア・ラ・カルト」コーナー



写真6 第4テーマ「高度経済成長の時代」コーナー

The Creation of Museums as Places for Intergenerational Dialogue: A Report on the “Modern History Regarding the Diversity and Transition of Sense of Value Concerning Things” Comprehensive Research Project

Takao IKEDA, Masato AIDA, Katsura AOYAGI, Hideki YAMAGIWA, Naoji FUNAYAMA,
Kouichi MURAKAMI, Koji DERIHA, and Koji KOBAYASHI

This research aims to show a model case for providing a forum from which to look back at the importance of things, study and discover a better future way of life, by way of museums promoting intergenerational dialogue between children, parents, grandparents and museum employees and, through that dialogue, the mutual exchange of information between children and adults.

This paper is a review of the research results accumulated and published to date, as well as a memorandum of the process of reflecting those results to the maximum in the creation of the Hokkaido Museum exhibits.

In particular, from the perspective of the prac-

tice of intergeneration dialogue, it was emphasized that the important factors would be not just exhibiting materials from the Showa period or materials that are nostalgic to various generations, but also materials that reflect locality, materials that at first glance are unidentifiable, and materials that arouse the interest of children; selecting exhibits from various perspectives, devising methods of exhibiting those materials in a way that they can be easily linked with present-day tools, or creating space in which the exhibits can be observed more leisurely, as well as devising different expressions for exhibition titles, name cards and explanations, too would all be important factors.

Takao IKEDA, Masato AIDA, Katsura AOYAGI, and Hideki YAMAGIWA : Folk Life and Industrial History Group, Research Division, Hokkaido Museum
Naoji FUNAYAMA : Director, Curatorial Division, Hokkaido Museum
Kouichi MURAKAMI and Koji KOBAYASHI : Museum Studies Group, Research Division, Hokkaido Museum
Koji DERIHA : Ainu Culture Group, Ainu Culture Research Center, Hokkaido Museum
